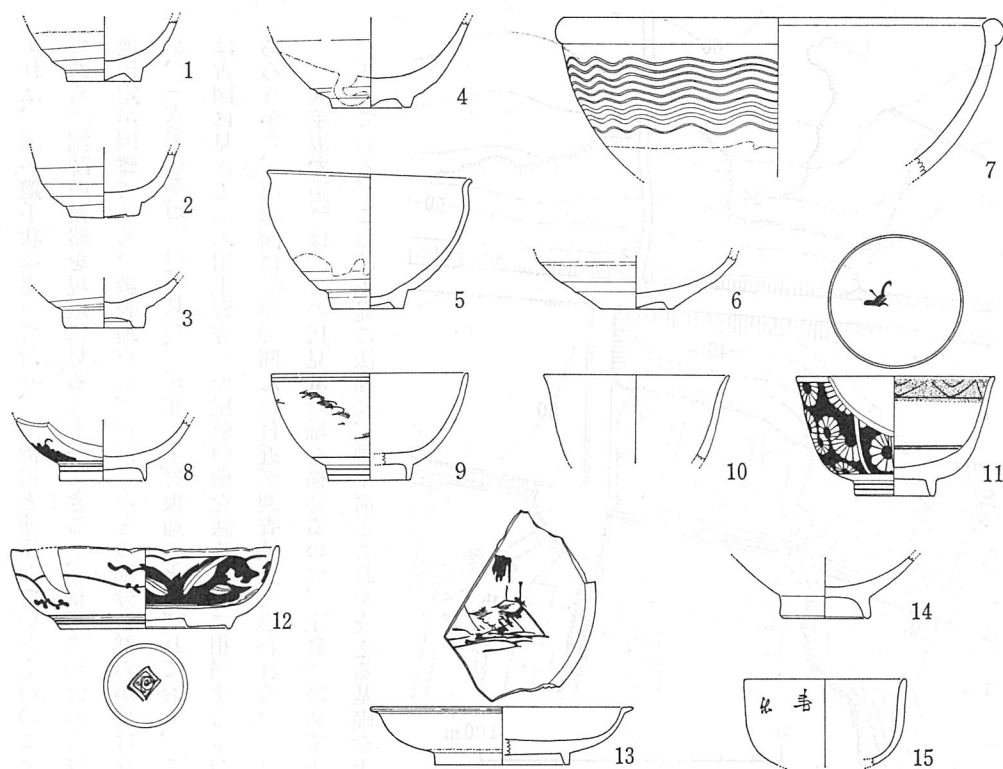




1～4・6・7 唐津, 5 唐津系
8～12 伊万里, 13～15 京焼系

第18図 開化天皇陵出土遺物実測図（その4）（縮尺 1/4 井上喜久男実測）

以上の事から当堤防敷は、堀跡の可能性が強く、この堀は江戸時代以前に埋められて、石組遺構が構築された事が察せられる。しかしこれが開化天皇陵の周堀であるか否かは、今回の所見だけでは不明である。従ってこれら遺構を保存する為、止水壁は第9図破線の位置に粘土壁を設けることとした。

渡土手の状況は、第13図のように、盛土により作られたもので、各堤とも築堤の土留の杭が検出され、3堤では土留の竹しがらみを検出した。出土物は陶磁・瓦・土器等の破片が多数あったが、近世の物を含み、文久修陵の際の築堤と見てよいようである。従って樋管改修は予定通り実施した。

本調査の出土遺物は、三千六百余片で埴輪片などの古代のものから中世、近世のものである。このうちどれが当陵と直接かかわりのあるものか、精査出来ていないので判然としていないが、一応形のわかるものの一部を第14～18図に示した。（石田茂輔）

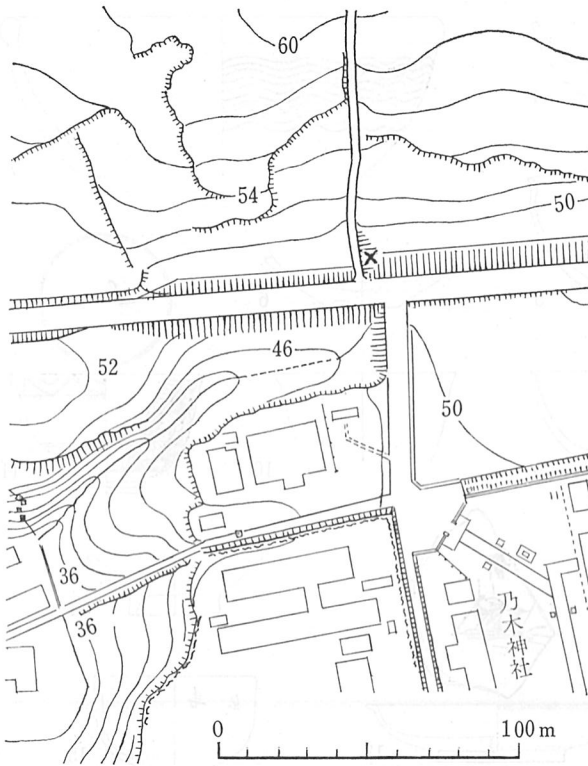
三 桃山陵墓地内の崖地擁壁設置及び排水管敷設箇所の調査

桃山陵墓地内の桓武天皇陵と乃木神社を結ぶ「大手坂参道」と通称する通路の一部（第19図の×印）が、降雨のため崩壊したので、その復旧工事（昭和五十一年八月四日から）に立会った。

当該地付近は、京都市田中勘兵衛氏所蔵の伏見城古図の一本に

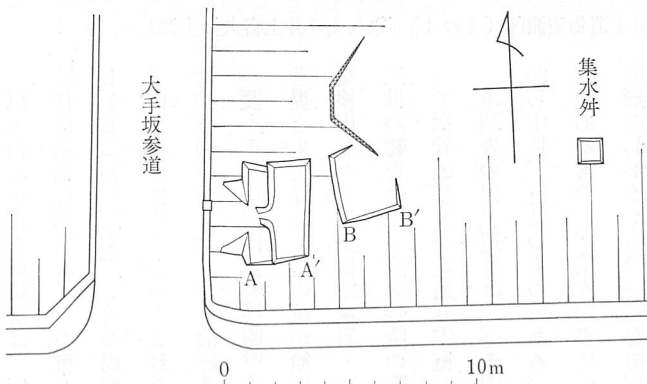
よれば、堀が鍵手状に走っており、宇治川と連絡していたものごとくである。堀跡の概略を現地に見ることができ、細部にわたっては現地比定が困難である。調査地点も、古図上のどの部分か詳らかではないが、「大手坂参道」の延長が、現在「上野坂通」と呼ばれており、これは古図に見える「本田上野守」の屋敷の前を通る道路に相当するものであろうから、第22図に○印で囲んだ付近が調査地点と思われる。

「大手坂参道」は、この伏見城の堀を横切るのに、土砂で埋めて土堤を渡している。この渡土堤の法面に、排水溝とこれを支える基礎を土留

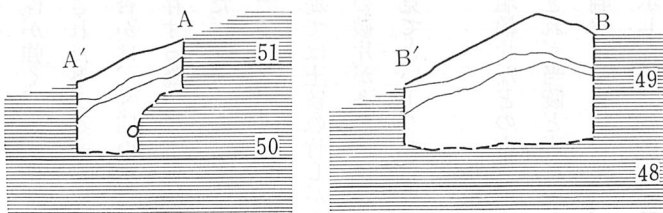


第19図 桃山陵墓地調査位置図 (1/2500)

擁壁として取設けるとともに、別に集水枡を取設ける工事に立会った結果、工事による掘削部分にはいずれにも伏見城の遺構は認められず、後世の盛土または堆積土であった。盛土は、渡土堤を築造した際のものであり、堆積土は、この渡土堤の盛土が流出して出来たものと思われる。出土品は、前記の盛土と堆積土中から出土したものばかりである。無釉坏（第23図1・2）黄白色を呈する堅焼きの坏で、型から起したものの。1の内面には、至近距離にある乃木神社と同じ四目結紋がある。



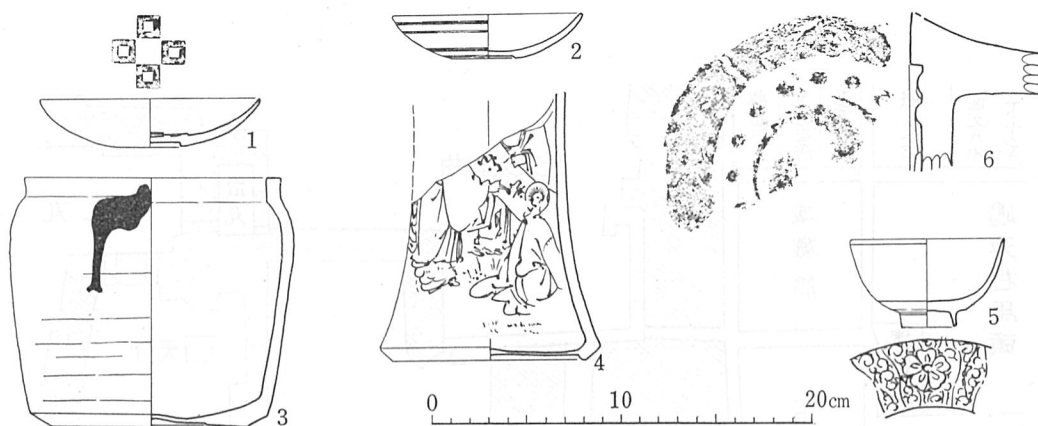
第20図 「大手坂参道」脇堀跡における堀方平面図



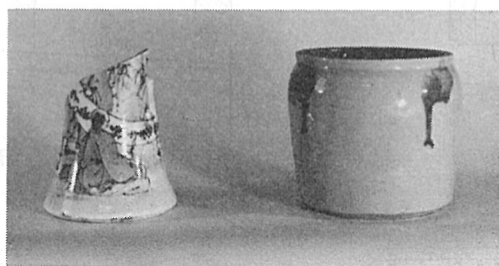
第21図 「大手坂参道」脇堀跡における堀方断面図 (1/80)



第22図 伏見城図（田中勘兵衛氏所蔵伏見城古図一本による）



第23図 「大手坂参道」脇堀跡の出土品(その1) (1/4)



第24図 「大手坂参道」脇堀跡の出土品(その2)

磁器(第23図3~5) 3の甕は、灰白色の胎土の上に、外面肩の部分三ヶ所にきついコバルト色の釉をかけ、外底と内頸を除く内外全面に黄灰色の上釉をかけたもの。花生と思われる4は、純白の素地に、竹林で文字を書いた紙人(または布)を中心に人物七人をコバルトで描いた染付

け。5の碗は、純白の素地に、二種のスタンプを使ってきついコバルト色の花文とくすんだコバルト色の唐草状の文様とを描いた染付。鍍瓦(第23図6) 中央に三巴を配し、その外に珠文を繞らしたものの。

(笠野 毅)

四 桃山陵墓地内銀明水の井戸浚えに伴う調査

桃山陵墓地は、慶長元年(一五九六年)木幡山に構築された伏見城の域内に当る。従って現在でも伏見城の遺構が陵墓地内の所々に点在する。

その遺構のひとつに、この城を築いた秀吉が茶の湯を楽しむために使ったと伝えられる銀明水と称する井戸が現存している。宇治川の水脈が地下水となり、この井戸に涌出していると想像される浅い井戸であるが、今でも満々と水を湛えている。近年相当に泥土と塵芥が流入して汚染して来たので、昭和五十一年九月二十四日、浚渫作業を監区職員の手で実施した。

井戸の位置は、檜樹、杉樹等が密生している樹林地帯の裾で、伏見桃山陵の北西約三〇〇メートルにある通称伏見城の「本丸」北側に当たる窪地にある(第25図)。

井戸周辺の雑木、雑草を除去すると、ほぼ外郭を確認することができた。外郭は、約二米四方で直径約二〇センチの石で地上に二〜三段に積